

# (1) 引き揚げ

## 無防備の巷で

諏訪市大和 塚原 節

私が住んでいた街、本溪湖は、奉天から朝鮮に通じる安奉線の中程にあった。三月、女学校を卒業して内地の学校に進学の予定だったものの、朝鮮海峡がとても危険だからと両親に説得され、私は宙ぶらりんの日を送っていた。戦況は急を告げており、父の勤める学校では先生方がほとんど召集されてしまったので、私は取りあえず事務員として学校に通い、雑多な事務処理に当たっていたが、私と年齢の変わらない青年学校の生徒達にも召集令状が届くようになり、次々と出征してゆく日が続いていた。でも父は折にふれ言った。「日本とソ連は不可浸条約を結んでいるから、北からは攻められることはない」と。その度に私は広い満洲の国土を思い、関東軍という強力な守備を心から信じていた。

本当に出入りの激しい街で、引揚げまでの約一年間に八路軍下にあった期間が最も長く、その間に出征した忘れられない日々のことを記してみる。

### 屈辱

八路軍の高官が着任したと伝わった翌日のこと、「十七歳から二十三歳の女子は全員集まれ」との布令が出された。両親は動揺し、母は急ぎ古い防空服を私に着せ、父は私の頭から砂をかけてこすりつけ、汚れた手拭いを首に巻きつけた。逃げも隠れも出来ない立場にあった。

指定の小学校の講堂には、すでに沢山の女子が集められており、三方の壁はほとんど埋っていた。少しの間に入り、早、始まっていた首実検の様子を遠くから見たりながら移動して来る。時々後ろの兵が女子を連れ出してゆく。とっさの思いつきで、私は口の中に唾を溜め始めた。首実検が隣まで来た時、私は溜った唾を少しずつ口の端からたらし、虚ろな視線を宙に流してみた。その時前に立った将校はいきなり一歩前につめ寄ると、私の顔にまともに唾を吐きかけ罵声を浴びせた。生温かいものが眼の下をゆっくり流れるのを耐えた。猛然と突き上げてきた怒りと口惜しさに、抑えていた声があつと咽頭

それが八月九日未明、突如ソ連軍が満洲国に進攻して来たのだ。次いで十三日には、隣組を通じた急の布令で道向こうの丘に集められ、数人の兵士から、各自五メートル間隔で、深さ八〇センチくらいの穴を掘れと命じられた。いわゆるたこづぼであった。「明後日の午前中ぐらいに、ソ連の戦車隊がこの街に到達すると推測される。よって明後日の朝、各自に爆弾を一個ずつ渡すから、それを持って各穴に待機、戦車隊が到来したら、どれにでもよいから爆弾と共に飛込むこと」。兵士達は大声で言い渡して去った。「いよいよ死ぬ時が来たんだ」。私は心の底から皇国を憂い、明後日は必ず死ぬだろう自分を、とても爽やかにみつめていた。何の恐怖もなかった。ただ「私が死んだらお母さん、悲しむだろうな」と一瞬心が上がった。しかし二日後の八月十五日、爆弾を受けとることなく終戦となった。その日から、私達は一転して敗戦国民となり、軍隊も警察もない、全く無防備の街に放り出されたのであった。

まずソ連軍が進駐し、次に八路軍、ついで新四軍と、

で鳴った。首に巻いていた手拭いを外すと、顔の皮がむけるほど強く拭った。堰を切った屈辱感が涙となつてあふれた。

解放されて帰る道々、なお止らない涙を拭きもせず振り返った眼に、二十人くらいの人達が兵隊に連れられて行くのがみえた。私は、これから先、幾度か襲うだろう苦難の目を思いやつた。

### 拉致と逃亡

八路軍が撤退するという噂が流れ始めたある朝のことだ。突然裏口から入ってきた二人の兵が、いきなり父の胸と私の背に拳銃を当てた。近く奥地へ移動するため、看護婦として連行するという。問答無用であった。呆然と立つ母に「絶対に死なないから」とだけ小声で囁き、瞬間に見た父の顔は絶望的だった。

集められた女子は百人を越していたと思う。広場で二列に並ばされ、左右のおのおの手首を荒縄で一メートル間隔くらいにしばられて、数珠つなぎにされた私達の行列は、七月の太陽の照りつける中を、二時間ほど歩かされたのだ。治道からは分からない野次がとび、野菜屑や小石がとんできた。逃れる術はなかった。行き着いた隣街の大きな建物の中でようやく縄をとかれ、「午後の汽車

に乗るから待つように」と言いわたされた。皆疲れ果て、言葉を交す人もなかったが、私は急がしく逃げる策をめぐらしていた。

「汽車に乗せられたら終りだ」と思うと気があせつた。いちかばちか、意を決して何喰わぬ顔で哨兵の所へ行つた。家を出るとき、出口の柵にあつた小さい財布を何となくポケットに入れたのが幸いした。それを見せながら、「朝食食べていない。大変空腹。門の前の店で饅頭を買つて来たい」と、その頃多少は使えた中国語に必死の身振りを加えて頼み、哨兵達の鋭い視線を浴びながら、許されて道向こうに並ぶ露店に走つた。

そして少しずつ移動し、五軒目の角でぱつと走り出した。とたん「逃亡！」の怒声と共に銃声が響いた。矢張り見張つていたので。もう無我夢中、角があれば左に右に小刻みに曲りながら、怒声と銃声に追われてどのぐらゐ走つただろう。「もうだめだ」と絶望が頭の中を狂いまわり、よるめきながら、でも足だけが走つていた。足だけが生きていた。街境の大きな橋をそれて、私は河原の葦の茂みに倒れこんだ。放心の時間はどのくらい流れたろうか。いつか川の流れの音が聞こえてきて、ようやく自分を取りもどした。

取ると、一変して無理矢理父に握手をしてから一斉に引き揚げて行つた。目茶苦茶に荒らされた部屋の中に、なす術もなく私達はただ呆然と立ちつくしていた。父が渡した小さな包は、当時の吾が家の最後のものであつたという。

今思う

夢中で過ぎた戦後は六十年を数え、今、ささやかながらも平和な生活の中に在る自分を思うと、終戦後の満洲で、たとえどんな苦難に逢つたとしても、命あつて帰国できたかけがえのない幸せが心に沁みる。それだけに、取り残され、棄民となつて果てた多くの人達を思い、抑えきれない哀しみと憤りがこみ上げてくる。敗戦後の満洲について語りつがねばならない実態は、そのまま戦争のむごさ、哀しさそのものであると思う。

それに私の心から離れない戦争孤児といわれる人達のこと。親の顔さえ知らず、記憶すら定かに持たないあの人達こそ、悲惨な戦争が残した生き証人である。日本の国として、もつと血の通つた対応が出来ないものかと思ひ続けてきた。戦争孤児の意味さえ知らず、無関心さが漂う今の時代の人達に、孤児達がどんなに哀しい人生の出発を強いられたかを、思いやつて貰いたいと思う。

「よく助かったな。よく見逃がしてくれたな。神の助けかな」ぼんやりした頭の中が少しずつもどつて来た。少し離れた向こう岸で、目隠しされた男性が二人、八路兵に銃殺されるのをぼんやりと見ていた。

掠奪

八路軍が撤退する夜のことで。両親と三人で眠つていた頭の上の硝子窓が、突然銃剣で突き破られ、ばらばらと破片が顔に降つて来た。「すぐ開けるから」と父は叫びながら、狂つたように私に布団袋をかぶせて廊下の突き当たりにつ張つてゆき、「絶対に動くな」と言つてから急ぎ戸口を開けた。なだれ込んで来た兵達は数人か、襖や押入れを矢鱈に突き破つて物色している様子に、布団袋の中で身を曲げている。私は生きた心地もなかった。「時計や万年筆はかくさず出さない」と日本語を使う兵がいて、叫びながら声が近づいたと思つた途端、隣の荷物がいきなり突き刺された。「そこは布団だ！」と父が叫んだのとほとんど同時に私は飛び出してしまった。私の前に両手を拡げて立ちほだかつた父と、床に額を押しつけて拝む母の姿があつた。

「我々は出発まじわだ。金と時計がほしい」と兵はわめき、どこからか飛び帰つて来た父から小さな包を受け取ると、一変して無理矢理父に握手をしてから一斉に引き揚げて行つた。目茶苦茶に荒らされた部屋の中に、なす術もなく私達はただ呆然と立ちつくしていた。父が渡した小さな包は、当時の吾が家の最後のものであつたという。

今思う

夢中で過ぎた戦後は六十年を数え、今、ささやかながらも平和な生活の中に在る自分を思うと、終戦後の満洲で、たとえどんな苦難に逢つたとしても、命あつて帰国できたかけがえのない幸せが心に沁みる。それだけに、取り残され、棄民となつて果てた多くの人達を思い、抑えきれない哀しみと憤りがこみ上げてくる。敗戦後の満洲について語りつがねばならない実態は、そのまま戦争のむごさ、哀しさそのものであると思う。

それに私の心から離れない戦争孤児といわれる人達のこと。親の顔さえ知らず、記憶すら定かに持たないあの人達こそ、悲惨な戦争が残した生き証人である。日本の国として、もつと血の通つた対応が出来ないものかと思ひ続けてきた。戦争孤児の意味さえ知らず、無関心さが漂う今の時代の人達に、孤児達がどんなに哀しい人生の出発を強いられたかを、思いやつて貰いたいと思う。



動員学徒時代（昭和20年3月）  
於奉天満鉄々道工場。筆者、左端。